【　座談会　】

# 教育課程の再編成、学校評価の導入
# いま教職員に求められる視点とは

公私立の幼稚園長が考える
幼稚園教育の「いま」と「これから」

田中 泰行
（練馬区 学校法人 向南学園 向南幼稚園 園長）

保戸田 美恵子
（浦安市立美浜北幼稚園 園長）

【コーディネーター】
磯部 賴子
（ベネッセ次世代育成研究所顧問、元全国国公立幼稚園長会会長）


今回の幼稚園教育要領の改訂を受けて、公私立の幼稚園では、教育課程の再編成や教員の指導にどのように取り組んでいくとよいのでしょうか。また、改訂と同時期に示された「幼稚園における学校評価ガイドライン」が提示する学校評価のあり方とは。「第１回 幼児教育・保育についての基本調査（幼稚園編）」（以下、本調査）で明らかになった結果も踏まえ、公私立の園長先生にご意見をうかがいます。

## 今回の改訂を機に見直したい教育課程

**磯部：**本日はよろしくお願いします。早速ですが、幼稚園教育要領の改訂に伴い、各幼稚園では教育課程の再編成が必要になってきます。先生方の園では、どのような視点からの見直しや再編成をお考えでしょうか。

**田中：**内容的には、とくに幼小連携や協同的な遊びについての見直しが必要と考えています。幼小連携については「連携」ではなく、「交流」に留まっているのが現状のため、小学校生活に自らとけこめる子どもを育てるために３年間の学びを見直したいと思います。そして協同的な遊びに関しては、友だちの良さに気づき、尊重し合う人間関係を通して子どもの成長を促していきたい。もちろん、これまでの教育課程にも前述の内容は含まれていましたが、表現がいささか抽象的でした。今回の改訂のポイントを踏まえ、具体性を高めていきたいと考えています。

**保戸田：**教育課程は毎年見直していますが、改訂を機に子どもの姿を改めて洗い出すつもりです。私の園は２年保育ですが、入園前の子どもの発達は個人差が非常に大きい。それを踏まえたうえでねらいや内容を検討する必要性を感じています。さらに預かり保育は教育課程外ですが、子どもにとって１日は連続していますから、教育課程の内容を踏まえた計画を立てたいと考えています。

**磯部：**本調査の教育課程に関する質問では、国公立は96.8％、私立は84.2％が編成していると回答しました（p,14、図１－１）。幼稚園教育の充実・発展のためにはすべての園において編成・実施が望まれますが、現時点でそれが実現していません。それは何が要因とお考えでしょうか。

**田中：**私立の８％が教育課程を編成していないことの大きな要因の一つは、教育課程と年間指導計画の混同でしょう。教育課程は一人ひとりの子どもがどのような道筋をたどり、成長・発達するかを踏まえた教育目標にあたる内容が中心となり、一方の指導計画は生活プランにあたりますが、それを明確に区別していない園も少なくないようです。幼稚園教育要領の改訂をチャンスと考え、教育課程の性格をとらえ直すといいでしょう。

## 幼児教育に求められるのは「Plan－Do－See」より「See－Plan－Do」の視点

**磯部：**教育課程の実施にあたっては指導計画を作成したうえで意図的・計画的な指導を行う必要があります。指導計画は、ほぼすべての園で作成されているという結果が見られました。先生方の園では、どのような手順で進められていますか。

**保戸田：**私の園では１年を７期に分け、期ごとにさまざまなねらいを設けています。担任はそれをもとに週日案を作成しますが、子どもの学びは必ずしも計画通りに進みませんから、期案と実態との間にズレが生じることもしばしばです。その場合は、なるべく期案に沿いながらも、今すぐに取り組む必要のない内容は後回しにするなど柔軟に対応しています。

**田中：**基本的には保戸田先生の園と同じ流れですが、私の園では「子どもの変わり目をとらえる」という観点で教員が話し合い、１年を５期に分けました。各期の計画は、行事や活動の計画、得られる学びや予想される子どもの姿などからなり、保護者にも配布しています。週日案は、教員が前週の子どもの様子を踏まえて作成しますが、そこにはあまり細かい内容は書きません。教員には、むしろ毎日の記録を大事につけさせています。私は、週１回、その記録をまとめて読み、個々の子どもやクラス全体の動きを把握するのに役立てています。

**保戸田：**私の園でも週ごとに反省を提出してもらい、それに対してコメントを書いています。コメントの内容として多いのは、グループのつくり方や集団のあり方、教師の対応など、教師本人には見えづらいことをアドバイスするようにしています。

**田中：**教育課程や指導計画に関して大事なのは、「計画」にとらわれ過ぎないことではないでしょうか。小学校以上なら「Plan（計画）－Do（実行）－See（評価）」で良いのですが、幼稚園教育はむしろ「See－Plan－Do」の考え方に基づき、まずは子どもの様子を見ることが必要でしょう。例えば、教師があるねらいをもっていても、子どもの興味がほかに向いていることがあります。その際には計画に固執せず、子どもの興味に沿って環境を整えるように心がけています。大きな目標はきちんと押さえつつ、目の前の子どもに柔軟に対応することが何より大切でしょう。もっとも、活動が場当たり的になるおそれもありますから、しっかりと記録して反省し、評価するというサイクルを重視しています。

## 「教える」という視点よりも子どもとともに生活や遊びをつくり上げる能力が大切

**磯部：**教育が効果を上げるには、教員の力量によるところが大きく、本調査でも国公立、私立ともに資質の向上が最大の課題に挙げられています。その改善策の一つと考えられる園内研修は、国公立は「月１、２回」が51.6％、私立は「年に数回」が43.3％と最も多くなっています（p22、図１）。先生方の園ではいかがでしょうか。

**保戸田：**新任の教員は、県や市の研修に多くの時間を取られ、園内の研修を充実させるのはなかなか難しいのが現実です。新任教員の力量を高めるために、経験豊かな教員を指導担当とし、細かい環境構成の方法について指導するなど、日々具体的な指導をするようにしています。保護者には「一生懸命がんばって勉強していますので、どうか応援してください」などと伝え、理解を求めることもしています。

**田中：**私立幼稚園でも、外部研修に時間を取られる状況は同じですね。私の園では、直接的な研修ではありませんが、近隣の住民との協力関係の重要性を理解してもらうために、園の周辺の掃除や雪かきを行うことや、行事で来園する保護者の放置自転車をなくすことを教員にやってもらっています。

磯部 賴子顧問
（ベネッセ次世代育成研究所）

**磯部：**教員の資質として最も大事なのは何でしょうか。また、教員の力量と経験年数は関係があると感じていますか。

**田中：**私は子どもの主体性を大事にした保育を第一に考えていますが、それを行うには子どもの気持ちを引きつけたり、ときにはクールダウンさせたりする力を備えていなければなりません。その能力には教師による個人差が大きく、その差を生み出すのは必ずしも経験年数ではないと感じます。保育では「教える」という視点も大切ですが、それ以上に子どもや保護者と向き合って豊かで充実した生活や遊びをつくり上げていく能力が求められます。そうした能力は教員本人が子どもの頃から保護者や隣近所の人たちと、いかにふれ合ってきたかという生活の経験から生み出されるのではないかという気がしてなりません。

**保戸田：**同感です。同じ新任でも、子どもの気持ちにすんなりととけこめる教員とそうでない教員がいます。後者は経験を積んでも、指導力に伸び悩むことが多いです。

**磯部：**最近の若い先生について感じることはありますか。

**保戸田：**先ほどの田中先生のお話のように、自身の生活経験が乏しいのかなと感じることは多いですね。例えば、生物や草花などに関する知識が乏しく、「教員になって初めて知った」という経験がとても多いようです。

**田中：**若い教員に接していて、その教員が何を分からなくて困っているのかが分からないことが増えました。以前なら、若い教員は「ここが分からない」と、きちんと言葉に出していたのですが。きっと出さないのではなく、出せないのでしょう。

**保戸田：**「何が分からないの？」と質問しても、すぐに答えが返ってこないことも多いです。経験年数に関係なく、一人の教員に求められることは同じですから、うまく言葉に出せないでいると若い教員には精神的に重荷になることが多いと思います。

## 特別に支援を要する子どもをめぐる保護者との関係づくりの難しさ

**磯部：**最近、保護者とのかかわりの困難さを耳にしますが、保護者との間に従来はなかったトラブルが起きていますか。

**保戸田：**担任一人で問題を抱えるのではなく、園長の私や主任教諭が対応する機会は増えましたね。その回数が増えると、担任が保護者との対応の難しさを感じてしまうようです。

**磯部：**保護者との関係づくりにおいては、特別に支援を要する子どもの指導がかかわると、教師の力量が問われるという声をよく耳にします。先生方の園ではいかがでしょうか。

**田中：**診断書の有無にかかわらず、特別に支援を要する子どもの数は、年々増えている印象を受けます。公式の診断書があれば、補助金を受けられ、指導を手厚くできますが、特別な支援が必要と感じた子どもの保護者に受診するように話しても、「うちの子に何の問題があるのか」などと言われてしまい、苦労することが多いのは事実です。きっと「認めたくない」という気持ちが働くのでしょう。

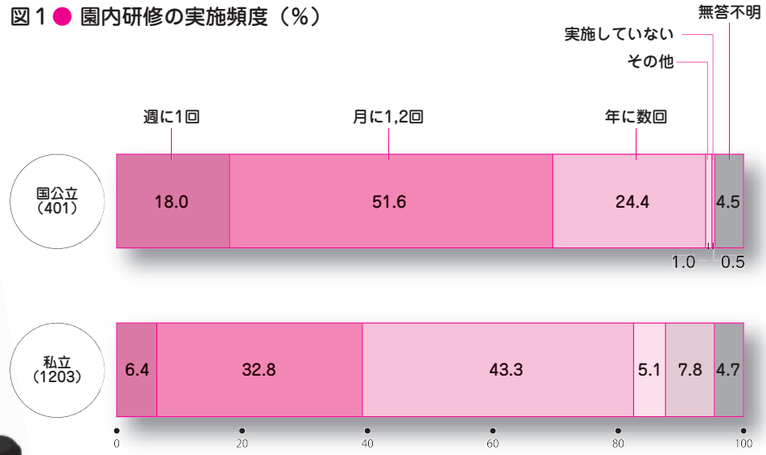
**保戸田：**私の園では、月１回、未就園児に園を開放するときに訪れるカウンセラーが特別に支援を必要とする子の保護者への対応に大きな役割を果たしています。カウンセラーの本来の目的は未就園児の保護者のカウンセリングですが、必要に応じて在園児の保護者への対応もお願いし、保護者と教員のつなぎ役になってもらっています。

## 学校評価の実施前にまずは自園の方針を明確にする

**磯部：**では、学校評価についての話に移りましょう。文部科学省から「幼稚園における学校評価ガイドライン」が出され、「自己評価」「学校関係者評価」「第三者評価」の３つについて示されました。自己評価に関しては本調査の結果によると国公立の90％が行っているなど取り組みが進んでいますが、私立でも「検討中」の園は多いことがわかりました（p24、図3、図４）。まずは自己評価についてのお考えをお聞かせください。なお、ガイドラインでは、自己評価は、教職員の参加はもちろん、保護者や地域住民を対象とするアンケートによる評価なども重要視しています。

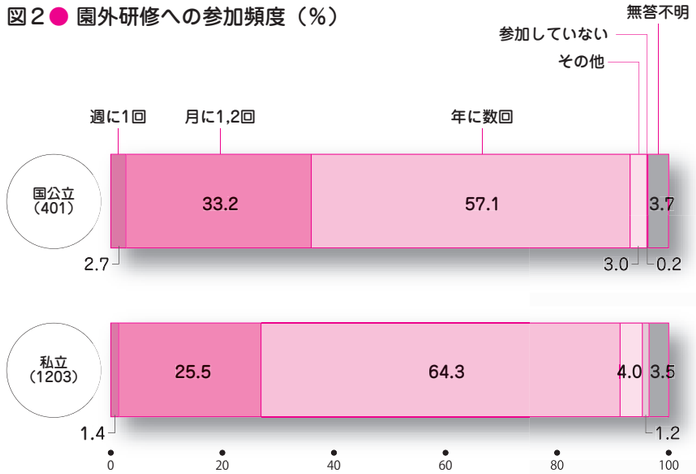
**田中：**私が制作に携わった私立幼稚園の自己評価に関する解説書では、評価項目は園長・設置者と教職員の２つに分け、教職員だけで140項目を設けました。各項目について教員自身が三段階評価をしますが、それを私の園で実施したところ、とても難しい問題が浮上しました。というのは、ベテ

図１● 園内研修の実施頻度（％）

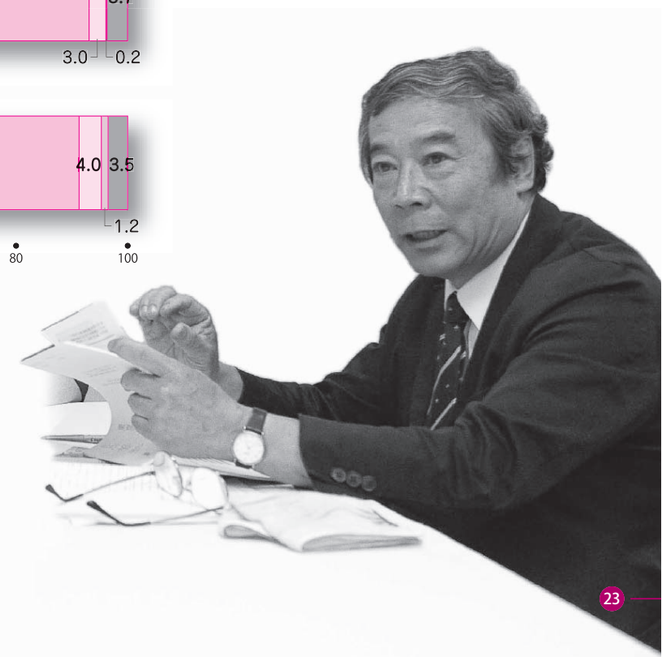



※（　　）内はサンプル数

図２● 園外研修への参加頻度（％）



保戸田 美恵子先生
（浦安市立美浜北幼稚園 園長）



田中 泰行先生
（練馬区向南幼稚園 園長）

ランほど自分に厳しく、評価の高さが必ずしも教育の質の高さを反映していないという結果が生じたのです。それはほかの園でも同様でした。その自己評価を公開すれば、保護者の誤解を招きかねないという懸念があります。

**磯部：**たしかに難しい問題ですね。

**田中：**教員が自分を振り返る機会になり、自己変革が促されるという点では、メリットは大きいのですが。保護者に公開する際には、そのような点を説明し、「教員が向上心をもって保育している」というアピールも同時にする必要があるでしょう。

**保戸田：**アンケートによる評価で気をつける必要があるのは、保護者が目先の損得だけで判断しないように、園の方針や目的・内容をきちんと説明することだと思います。たとえば、園の方針とは無関係に、「この行事は○月にしてほしい」「この活動に参加させてほしい」などと、保護者の都合や思いだけで評価されるのは残念です。それから、クラスの人気投票のようになってしまうと、一生懸命に取り組んでいる教員が報われないこともあるので注意が必要でしょう。

**磯部：**ガイドラインでは、学校関係者評価は、保護者や地域住民で構成された委員会などが自己評価の結果について評価することとしています。もう一つの第三者評価は幼稚園に直接のかかわりがない第三者が専門的な立場から評価するとしていますが、「今後さらに検討することが必要」という記述にとどまりました。今後の動向を注意して見守っていく必要がありますね。

**田中：**学校評価の実施に際しては、まずは子どもにとって最善の幼児教育とは何かという認識を深める努力をする必要があるでしょう。それと同時に、幼稚園は自園の方針をしっかりともち、外部の評価により教育が左右されないようにすべきです。そのような姿勢が子どもにとってのよりよい教育をもたらすのではないでしょうか。

**磯部：**本日は貴重なお話をいただき、どうもありがとうございました。

**図3● 自己評価・外部評価の実施（%）**

※「行っている」の%

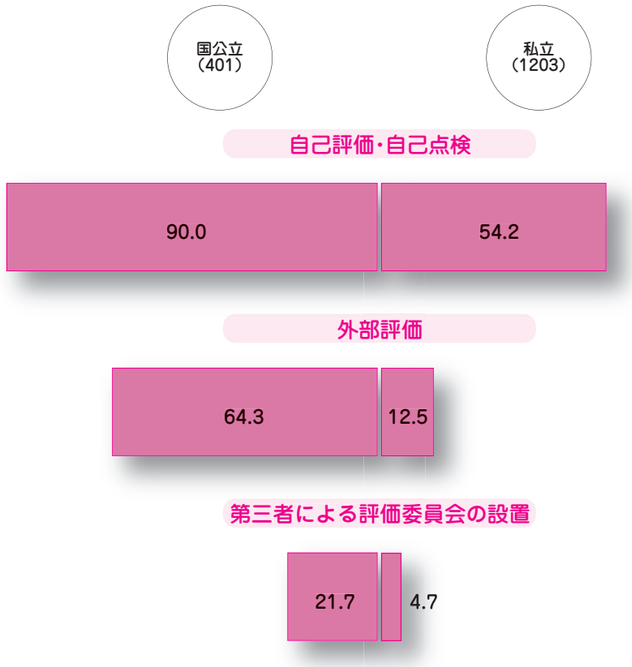
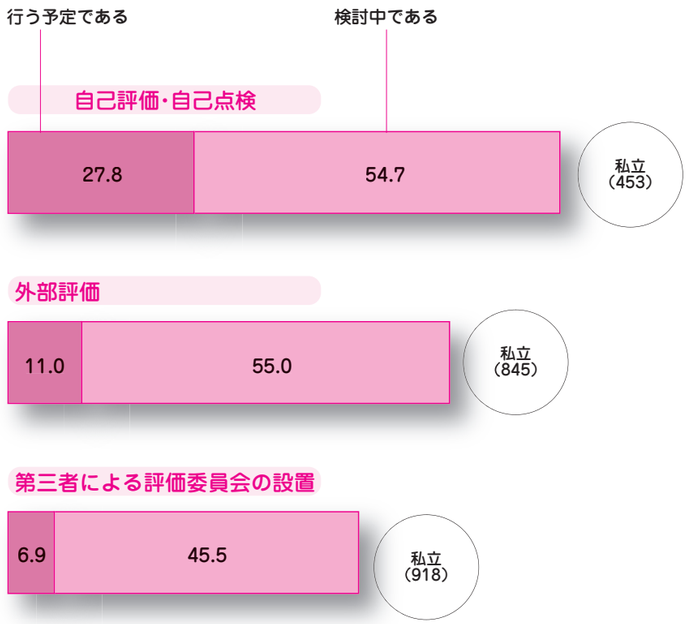



**図4● 評価制度の新たな導入について［私立］（%）**

※現在行っていないと回答した園のみ






## ベネッセ次世代育成研究所について

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

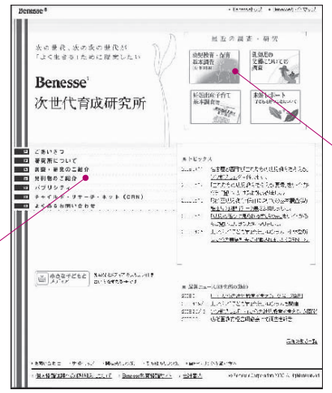
また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

## 調査結果をホームページでもご紹介しています。

発刊物・調査結果の無料ダウンロードや、詳細な報告書の購入申し込みができます。

シンポジウム等の最新情報は、ホームページをご覧ください。




**発刊物のご紹介●**

「これからの幼児教育を考える」バックナンバーや、幼児の遊びにみられる学びの展開を事例集にまとめた「学びの芽」が無料でダウンロードできます。

**●調査・研究のご紹介**

幼児教育・保育についての基本調査、乳幼児の父親調査、乳幼児の視聴に関する調査結果などが無料でダウンロードできます。

**http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/**

（各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください）

これからの幼児教育を考える
2008 秋号

2008年９月１日発行
発行人：松澤 拓也
編集人：後藤 憲子
印刷・製本：㈱協同プレス
企画・製作：ベネッセ次世代育成研究所
デザイン：森一典デザイン事務所
執筆協力：二宮良太
撮影協力：ヤマグチイッキ
発行所：㈱ベネッセコーポレーション
〒101-8685
東京都千代田区神田神保町１-105
神保町三井ビルディング
TEL. 03-3295-0294

©ベネッセ次世代育成研究所　無断転載を禁じます。

### 編集後記

今年３月の幼稚園教育要領の改訂を受け、今号では保育の現場ではそれをどのように生かしていくとよいかについてご紹介しましたが、いかがでしたか？　今回の取材で幼稚園教育の現場の先生からお話をうかがっていて感じたのは、日々の保育の中における幼児と先生方の交流について、そのなかでの学びや支援の内容を言葉で説明するのはとても難しいということでした。その一方、改訂の内容を受けての教育課程の見直しや、自己評価の導入に向けては、先生方が日々おこなっている当意即妙ともいえる子どもたちとの交流を言葉にしたり、外部に伝えることも必要になってくるかと思います。

特集で取材させていただいた神長先生が「特別なことをするのではなく、今までの活動を言葉にして園内で議論したり、外に伝えていく工夫が必要」とおっしゃっていたことが印象に残りました。（杉田）